和を以て貴し

「週末寸言」原稿 20101002

「一に曰く、和を以て貴しと為し、忤ふること無きを宗とせよ。人皆党有り、また達れる者は少なし。或いは君父に順不、乍隣里に違う。然れども、上和ぎ下睦びて、事を論うに諧うときは、すなわち事理おのずから通ず。何事か成らざらん」

日本書記に記載された聖徳太子の「十七条憲法」のうち第一条である。古来、烏合の衆の野合原理と非難されるきらいもあった「和をもって尊しと為す」だが、近ごろ少し風向きが変わってきたそうだ。（株）博報堂生活総合研究所による「生活定点データトピックス」（２０１０年８月９日）によれば、「今の税金は高すぎると思う」という人が急激に減少してきた。代わって、「多少、税金が高くても福祉を充実させるべきだ」という人が着実に増えて、前者の３８．７％より１ポイント多い３９．６％になったというのである。

ちなみに消費税が３％から５％に増税された翌年にあたる１９９８年には、「高すぎる」派が７４．３％、「福祉充実」派は３０．１％と圧倒的な差であったというから、その違いは驚きだ。

同報告によれば、他の設問でも「個人の利益を犠牲にしても国民全体の利益を大切にすべきだ」という回答が７割弱に上るそうで、いずれも過去最高だという。同報告は、近年「利己から利他へという流れが日本人の間に定着してきている」と総括している。はたして、この原因は何だろう？

近年、中国人観光客の秋葉原での豪華な電気製品の買いあさり風景、一流企業経営者のあきれるばかりの高額所得の話、あれほどに格差社会を謳歌していたアメリカ人のリーマンショック以後の没落状況等々、「自由」競争の究極の姿を見せつけられる機会が増えてきた。自由な競争に委ねれば神の見えざる手が万事幸福な結論を導いてくれるとはアダム・スミスのご託宣だったが、「新」古典主義経済とやらをやってみると、国中あちこちギクシャク、加えて失業者の山。いろんなこともあったが、やっぱり太子の「和」こそ一番ということらしい。